

マリー・ヴィグマン 「新しい芸術舞踊の本質」¹⁾

Mary Wigman, « Vom Wesen des neuen künstlerischen Tanzes » (1936)

舞踊はどのような現象形態においても、生きた人間と結びついている。したがって他のいかなる芸術も、演技の生命に満ちた瞬間にこれほど依存してはおらず、この瞬間の直接的な作用にこれほど左右されはしない。舞踊現象のこのはかなさには、舞踊芸術が発揮しうる特別な魅力があるのみならず、そこには皮相化やうわべの満足といった危険、仮象と存在を混同する危険も存している。というのも演技により引き起こされる魅惑的な瞬間の前に、この演技の根幹にある「作品」が後退し、演じることがその造形性を凌駕してしまうからである。

ここから、一般に舞踊と舞踊家に通常課せられてきた芸術的要求が、他の諸芸術の領域においては自明に通用している要求に常に合致するわけではない、といったことが起こってくる。

我々が舞踊に求めるものが視覚的饗宴に他ならぬならば、また我々が感性の享楽のために、人間の身体運動が伴う美でこと足れりとするならば、舞踊が諸芸術の位階において他と同じ地位を求めることは決してできないだろう。舞踊は他のヨーロッパ諸国においてまだそうであるように、愛玩の対象として愛顧を求める娯楽技芸のままだろう。

ドイツでは世紀転換期頃に舞踊芸術の領域で変化が起こり、そこから必然的に形式の刷新が導かれることとなった。そこで行われたのは自己の本質の見直しと、本来的に備わっていた力の源泉への立ち戻りにほかならない。その源泉からは真の芸術がすべからくいつの時代も供給されてきたし、現在もそうである。そこから一歩ごとに踏み敷かれてきたのが、体験と認識をもたらす探求と発見という名の道であり、魂と精神の領域を新たにうち開き、その終点に立った者が舞踊の生きた担い手であることを自覚する道である。

それが新しい芸術舞踊のドイツにおける始まりであったのだし、まさしくそれ以降、舞踊において分割されな

い全一性を備えた人間が再び姿を現したということを意味している。

踊る人間は、自然に与えられた運動の力の流れを意識するようになり、彼の身振りのリズムの言語は、人間存在の生の中に根を下ろすことにより感性と意味を獲得した。

純粋な遊戯性に触れる喜びに、悲劇性の崇高な真剣さが肩を並べる。単なる優美は英雄的祝祭的なものの中にその対極を見いだす。このように活発化した諸力の遊戯の総体から、これまでと異なる新たな相互関係が生み出された。

人間と人間が宿命的に結びつけられている万物の生命現象を直接関連づけることで、舞踊は内容と素材とテーマを豊かにするにとどまらない。新しい感性においてうち開かれた体験世界から、新たな舞踊形式が育ちつつある。もっとも、内容と形式の緊密な存在統一への融合は、舞踊の身振りに説得力ある具象性を与え、真の芸術作品のすみずみに光をあて、舞踊が他の人々に及ぼす奥深い作用を説明する。というのも、舞踊の芸術言語においては、人の目に見えるものだけでなく、可視化されないながらも生きた現前として我々に語りかけるものが、秘密めいたやり方で作用するからだ。それは人間の身振りが由来する魂の根源であり、身振りが感性と意味を受けとる精神的背景である。

このような目に見えるものと見えないもの、感知できるものとできないものの結合は、いつの時代も真のドイツの芸術創造に通ずる特徴でありつづけてきた。新しいドイツの舞踊もまた、この特徴の指標を見まごうかたなく備え、それにより自らの地位を、諸芸術の位階における他の芸術と平等の地位を当然として求めることができる。

(訳：古後奈緒子)

1) [訳注] 翻訳に際しては以下を底本とした。Die tänzerische Situation unserer Zeit. Ein Querschnitt. Carl Reißner Verlag, Dresden 1936. S. 8-9.